

2012 年 6 月 22 日～30 日に中国科学院研究生院への講義のため出張した。研究生院での講義は 2010 年に続き 2 回目である。講義は 27, 29 日の 2 日間であったが、中国地震局の金紅林さんに招待されていたこともあり、出張を少し早めて渡航した。

今回の講義では平賀さん、上嶋さんと 3 名で分担して実施した。中国側の担当は孫文科教授で、前回は Wei Dongping 先生だったのが、交代していた。我々が行ったシリーズの講義は研究生院地球科学研究科の夏学期の講義の一環として 6 月 11 日～7 月 6 日の期間に集中講義として行っているもので中国内外から多くの著名研究者を招聘してきている。今季の講義の一覧が研究所の玄関にパネルとして掲げてあり、そこには日置幸介北大教授、唐戸俊一郎 Yale 大学教授、桂智男バイロイト大学教授等の名前があり、中国内からも呉忠良教授、馬宗晋教授などの名前が挙がっていた。我々の講義は「東京大学教授系列講座」という名前で登録されていた（写真 1）。

講義は 3 名がそれぞれ 2 日ずつ分担担当しで午前 8 時 50 分から 2 回の休憩時間を含め 11 時 50 分までの 3 時間であった。できるだけゆっくりしゃべった方がよさそうであったので、日本での講義よりは少し内容を減らしてゆっくり話すように努めた。いつものことながら TA として高翔さんがついてくれて食事や交通など生活に関してよく面倒を見てくれた。彼は博士号をとったばかりとのことで、少ししたら故郷の近くの青島にある海洋研究所にポスドクとして就職することであった。講義への出席者は十数名であった。休憩に入る前には質問を受け付けたのだが、特に質問もなく、果たしてどこまで理解できているのか不安ではあったが、高さんには“よくわかっておもしろかった”というお世辞ともつかぬ評価を頂いた。（写真 2, 3, 4）

講義終了後、孫先生、高さん及び地震研国際室で招聘した王多君（Wan DuoJun）さんたちと昼食をごちそうになった。そこで、我々の派遣についての意見を聞いてみた。孫先生からは、“もし可能であれば 1 名で全体を通じて講義してもらえると、お互いに負担が少なくて済むのでは”と言われた。確かに中国側にしてみると短期に続けて 3 名来るのは対応が大変かもしれない。こちらからはなかなか 1 名で全部と言うと派遣可能な教員を見つけるのが難しい、というように答えた。一方、高さんからは、むしろ 3 名でやったほうがいろいろな話が聞けて良い、という意見があった。なお、高さんからは、さらに地震研全体の紹介をしてもらえるとよかった、という意見があった。確かに誰も地震研全体の紹介をしたわけではないので、できれば最初に講義を行う講師が地震研全体の紹介をまずしてもよいのではないかと感じた。また、シラバスの送付が締切に間に合わず事前に学生側にわたっていなかったことがわかった。十数名の学生は「東京大学教授系列講座」というタイトルだけで出席してくれたわけで、これは来年からは改善すべき点であると思う。

なお、6 月 27 日（水）の午後に少し時間がとれたので中国地震局地質研究所を訪問した。この研究所は地震研究所の国際研究拠点としてオフィスを借りていることでもあり、現状の確認と今後のことについての検討と協議を行うためであった。午後 1 時 30 分頃研究生院を出発。地質研究所はタクシーで 30 分くらいの北京の北部にある。上嶋さんの電磁気グループと我々の GPS グループが COE プロジェクトでこの地質研究所を拠点として共同研究を実施したことから、この研究所に一室を借りて国際共同研究拠点としてきた。当初はこの拠点に計算機を置くなどしてデー

タの収集や解析に使っていた。しかしながら、COE のプロジェクトが終了し、電磁気グループは現在でも共同研究は続けているものの、GPS グループはカウンターパートの Shen 教授が北京大学に異動したこともあり、拠点の部屋はほとんど立ち入ることもなくなっていたのである。当日は上嶋さんとカウンターパートの Tang さんがおいでになったので、Tang さんの研究室にお邪魔してこれまでの経緯について伺った。その結果、現在では拠点として使われていた部屋はすでにキャンセルされて地質研究所の研究室として使われているとのことであった。また、その部屋を訪問し現状を確認した。地震研究所としても共同研究は続けてはいるもののこの部屋を続けて借りている必要はないことから、拠点としての研究室を保持する必要はないとの結論に至った。（写真 5）

なお、この地質研究所には地震研究所においでになった嶋本先生が広島大学定年後 2011 年より在籍していることからお会いしたかったのだが、四川省に現地調査に出かけているということであったので会うことはできなかった。午後 4 時頃地質研究所を辞し、地下鉄を乗り継いで研究生院に帰着した。

北京に到着した時は、最近すっかり名物となったスモッグ（日本でも昭和 40～50 年代はそうであったが）がひどく、健康に悪そうな環境であった。その後雨の日が続き、中国を去る日によりやく晴天となった。雨にあらわれたせいかこの日だけは青空が広がってすがすがしく感じられた（写真 6）。地震局にも研究生院にも国際室で招聘した人が増え、行くといつも温かく歓迎してくれる。最近の経済的な発展もあって北京での滞在が我々にとっても年々住みやすく感じている。是非今後もこのような連携を続けていってほしいものだと感じた。

8Y	Gueydan	大学	Continental lithosphere (大陆岩石圈 连续性与力学)	2
61503 7Y	Tomoo KATSURA (桂智男)	德国拜罗 伊特大学	Physics and Chemistry of the Earth's Interior (地球内部物理与化学)	2
61503 8Y	Shun-ichiro Karato	Yale大学	Water in Earth and planetary interiors: From atomic to global (地球与行星内部的水: 从原子至全球)	阶段
61600 2Y	刘建忠等	中科院 国家天文台	比较行星学新进展	4
61600 3Y	Kato. TERUYUKI	东京大学	东京大学教授系列讲座	7 6
62500 1Y	张青	北京大学	构造地质新进展	3
62500 2Y	林景星	中国地质 科学院	"生态环境地质学—21世纪的新兴学科"	8
62500 3Y	刘树文	北京大学	微量元素地球化学	阶段
62500 6Y	Bertrand Maillet	巴黎高师	From sedimentary basins to mountain belts: a tectono-mechanics approach (从沉积盆地到造山带) "院士系列: 构造地质与地震"	5 综

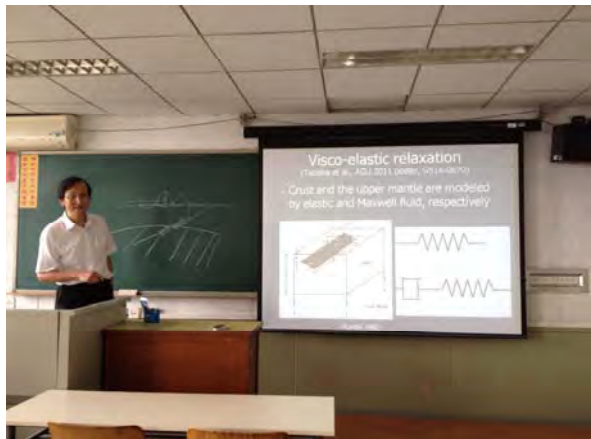
(写真1) 研究生院の玄関のパネル



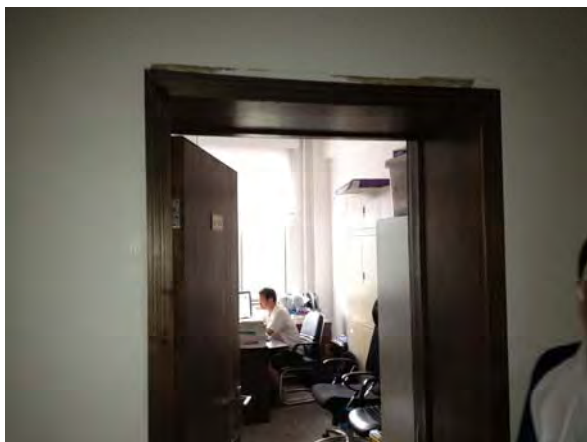
(写真2) 受講生と共に



(写真3) 講義中の風景



(写真4) 講義中の風景



(写真5) 地質研究所の拠点の現状



(写真6) 最終日に近くの交差点から研究生院の講義棟を望む。